



蓮也は瞑想により阿頼耶識の次元へ降りていき、白き祝由師・オオタネコに会い、オオタネコの師であるオオモノノヌシに会うように言われた。

エスメラルダ

「これが七輪山（しちりんざん）への地図です。七輪山はオオモノノヌシの力によって万年極寒の地となっています。特に、その奥地の谷“谷神（こくしん）”は最大冷気が立ち込めており、その冷気の禊（みそぎ）に耐え抜いたと認められた者に力を授けると言うことを師・オオタネコより聞いております」

「それが“谷神のイニシエーション”よ」

蓮也

「・・・谷神のイニシエーション」

ヘティス

「とりあえずへぱに完璧に可愛くって、完璧に防寒できる服をつくってもらったわ！w」

蓮也

「俺は火属性魔法にてバリアを張るから、どのような冷気であろうと関係ない」

ヘティス

「相変わらず自信満々ねw」

蓮也

「当然のことを言っているだけだ」

エスメラルダ

「気をつけて行ってくるのよ。七輪山の谷神には多くの修行者が挑んでいるけど、帰ってきた者は殆どいないと聞くわ」

ヘティス

「大丈夫、私がついているから！w」

蓮也

「足手まといになるなよ」

ヘティス

「ちょっとお！なるわけないでしょ！いざと言う時に私のヒーリングもきっと必要になるわ！」

極寒の地故、蓮也はケントニスに村に待機させ、ヘティスはブーハとキキをエスメラルダに預け、へぱイトスのみ随行させた。

蓮也・ヘティス・へぱイトスの三人は、馬車を乗り継いぎ、数日かけて七輪山の麓まで来た。そこは銀色の雪の世界が広がっており、オオタネコの治療院の建物が今も存在していた。その建物は郷の人たちによって保護され、神社仏閣のような聖なる場所となっているようであった。

ヘティス

（ついこの前までネコ師匠とアンちゃんと同じにいたのね。なんか不思議な感じ・・・）  
（・・・ネコ師匠、見守っててください）

ヘティスは、その建物を懐かしそうに見て、山へと進んで行った。  
三人が山の奥へ進めば進むほど、雪は深くなり寒さは強くなる。



気がつくともも後ろも猛吹雪で何も見えない状態になっていた。

ヘティス

「れ、蓮也はそんな格好で、何で平気なのよ・・・！」

蓮也

「これが火属性魔法のバリアの力だ」

ヘパイトス

「ヘティス、これ以上は危険です。防寒具の耐久温度を超えています。ヘティスの体温が下がってきています」

ヘティスのスマートチョーカーには、体温や脈拍などのヘルスマーターがついており、そのデータはヘパイトスに常に送られ、ヘパイトスはそのヘルスマネジメントを常に行っている。

ヘティス

「そんなの言われなくても、超寒いからわかっているわよ・・・！」

蓮也

「仕方のないヤツだ」

蓮也はヘティスの肩に手を回し、自分の方へと抱き寄せた。

ヘティス

「きゃ！何すんのよ・・・！」

蓮也

「おい、凍え死にたいのか？それともお前は帰るか？好きにしろ」

蓮也の火属性魔法のバリア内にヘティスが入ると、ヘティスの体温は元に戻った。ヘティスは少し頬を赤めながら、黙ってその状態で歩いていく。蓮也も、それ以上は何も言わずに雪の中を歩いていく。

ヘティス

（あったかい・・・。こうしていると何かとても落ち着くわ・・・）

更に進むと、少し吹雪が収まって来たが、それとは逆に、更に冷気の強さは増した。

蓮也

「このような冷気ははじめてだ。俺の火属性バリアに冷気が侵入してくるとは」

「これはただの冷気ではない。これがオオモノノヌシの冷気なのか・・・」

ヘティス

「蓮也、あれは・・・」

目の前に大きな谷があり、その谷の大滝の水は凍結しており、巨大な柱のようになっていた。二人はその谷の壮大さと強いオーラに圧倒された。

ヘティス



「あの谷の奥から凄いオーラを感じるわ。それがこの冷気になっているのね・・・」  
蓮也

「つまり、これが“谷神”か」

ヘティス

「そういえばエスメラルダ先生が、その“谷神”の近くには小屋もあるって言っていたわね」

辺りを見回すと、雪で埋もれかかった小屋を発見したため、二人は一旦、そこに退避することとした。

中に入ると、暖炉と薪があったため、蓮也は火魔法で火を起こし、部屋を温めた。

ヘティス

「アンタって便利よね～、そうやって魔法が使えるから」

蓮也

「俺にとってはこれが普通だ」

ヘティス

「部屋が温まって来たわ！これなら防寒具がなくても大丈夫そう」

蓮也の手を見ると、少し冷気でやられて赤くなっていた。

ヘティスは蓮也の手を取り、しばらくヒーリングをした。

ヘティス

「少し肺経から冷えが入り、肺に達しているわ。今、補法によって冷えを追い出すから、じっとしてて」※

蓮也はヘティスの手の温もりを感じた。エスメラルダのヒーリングとは、また違う温もりのエネルギーを蓮也は感じていた。

ヘティス

「これで少しはいいわ。けど、あなたは肺の状態がよくないわ。私がもう少しヒーリングしてあげるから・・・」

蓮也

「いや、俺には時間がない。これで十分だ。今から谷神のイニシエーションを遂行する」

ヘティス

「え、ちょっと待ってよ・・・！ダメだってば・・・！」

ヘティスの静止を振り切り蓮也は立ち上がり出て行った。

ヘティス

「あーん、もう！ダメだって言ってるのに！」

「もー、知らない、あんなヤツ！」

と言いつつもヘティスは蓮也の身体を気遣っていた。



自分も一緒に出ていきサポートしたいが、この冷気では不可能だと思い、せめてこの場で祈ることしかできない、と彼女は思った。

**【解説】**

手の太陰肺経は呼吸器系に関係し、体表では胸部から親指に至る。  
補法とは、気を補うことである。